

□ 第2回 複合施設の設置及び運営に関する懇談会 議事録要旨

日 時	平成 22 年 2 月 23 日 (火) 19:00～21:00
場 所	荒川区役所 4 階 庁議室
出席者	<p>〔委 員〕 柳田邦男座長、阿久戸光晴副座長、山崎一穎委員、小林敦子委員、志村博司委員、斉藤泰紀委員、並木一元委員、竹内捷美委員、戸田光昭委員、吉田詠子委員、斉藤邦子委員、横山幸次委員、上田寛子委員、興野愛子委員、高田忠則委員、三嶋重信委員、三ツ木晴雄委員、川寄祐弘委員</p> <p>〔陪席者〕 友塚教育次長、藤田文学館調査担当部長、高梨子育て支援部長、佐藤社会教育課長兼文学館調査担当課長、北村南千住図書館長、鈴木指導室長、濱島計画課長、小泉児童青少年課長</p> <p>〔事務局〕 北川総務企画部長、五味総務企画課長、飯田特命担当課長、吉野南千住図書館管理係長、坂入文学館調査担当係長、中野企画係長、谷井企画係主査、須田主事</p>

1 これまでの経過

2 各分科会の報告

(1) 図書館

(2) 文学館

(3) 児童育成施設

3 複合施設の連携について

図書館まとめ案

分科会まとめ案

児童育成施設まとめ案

4 意見交換

●児童育成施設について

- ・ 育成施設というのは、上から与えるという感じがする。「遊ぼう」というものが前面にできるようなキャッチフレーズをつくる。
- ・ 子どもたちがここへくると楽しくてしょうがない、二度も三度も来たい、遊びたい、学びたいというイメージが子どもたちの言葉から弾けるようになってくると成功。
- ・ 「子育て支援機能」「人材育成・ネットワークづくり」が、本当にここの場でこれが必要なのか疑問を感じる。

- ・ 子育てに不安を持っている母親たちを支援することが、結果としてゆるぎない評価（「日本一」というような評価ではなく）につながる、核家族の中で、DVの問題等々、若い母親たちは相当深刻な事態になっている。
- ・ 若い母親たちが集ったり、相互に悩みを打ち明け合ったりという機関が区内に少ないと聞いている。
- ・ 体験的遊び・学びの機能は、一番中核であり、施設そのものが直結する。ソフトで事業展開するのもあるが、子育て支援機能、交流・集い、人材育成・ネットワークづくりについては、どこかでできる可能性がある。
- ・ 児童施設の4つの機能を残すことにこだわった。賑わいをもつためには、継続的にこの施設のファンづくりをしていかなければならない。自分がいいと思ったイベントでも人が集まるという保証はない。来るための動線が重要。
- ・ 体験・学び、その下には子育て世代の小さな子どもたちがいて、そうした子育て世代の若い母親や子どもたちが安心して来られるような施設があって、その世代が施設に馴染むことによって、図書館も利用するようになり、大人になって吉村作品に触れるという流れを作っていきたい。そういう意味で、子育て支援の機能は残したい部分。同じ施設をうまく共同利用する部分は大いに必要。

●図書館について

- ・ 図書館の機能として挙げられている「子ども読書活動を推進する図書館」「子どもも大人も楽しめる絵本館」とあるので、児童育成施設との関連で「子ども」を一つのキーワードとして図書館に入れていく。
- ・ 図書館は誰にでもある程度読める図書館がいいのか、専門的などところで努力していくのがいいのか。25万冊の蔵書のやり方として、子ども、児童、絵本、ヤングアダルトに比重をかける可能性もあり、ここに力点を置くという特徴ある蔵書の集め方もある。
- ・ 目的がはっきりして、ヤングアダルトや健康情報、障がい者のための情報などが積極的に活けると支持されて評価が高くなる。
- ・ 児童書・絵本で2万冊くらいでは少ない気がする。
- ・ 紙に書かれた活字だけでなく、ITにも踏み込んで視野に入れていく（電子書籍、DVD等）。

- ・ 中高生から深刻な本離れである。ヤングアダルトコーナーを充実すべき。中高生にコーナーの充実に力を貸してもらおう（ボランティア等）のもいい。
- ・ 障がい者の方へ提供する録音図書の録音を行う部屋が必要。
- ・ 読み聞かせは広いスペースがあるだけでなにもないところでもできる。いい活動をすれば人は集まる。子どもが集まるいい図書館をつくっていただきたい。
- ・ 「大人のための絵本」が注目を集めている。
- ・ 絵本館と児童育成施設の遊びの場が融合したときに荒川区ならではの図書館になる。この融合・統合を重視したい。
- ・ 絵本の館、絵本の城という風にして、その中で体験や遊びの広場をいれていくべき。
- ・ 絵本は世代を超えて本当に良いものに触れているということ。たとえば、母親が子どもを連れてきて、子どもが遊んでいる間に豊かな絵本に触れる、そして帰り道に子どもに語って聞かせる、そういうことが豊かにできること。絵本館が本当に輝くためには、その価値が生まれてこないといけない。
- ・ 図書館の部分と合わせて絵本の機能を拡大・充実したものができると売りになる。

●施設全体について

- ・ 絵本館と遊びの施設が一体化しているのが一番の理想。
- ・ 「柳田邦男ワールド」的なインパクトのあるものがないと、人が来ないし、長く続かないという気がする。
- ・ ボランティアの介在など人材をつなぎ合わせる専門職員の育成、知識・経験がどれだけ発揮されるか、その辺りがカギである。
- ・ 文学館を人の通る道筋につくる、図書館には閲覧室など学生が学べる場をつくる等、人のにぎわいを目指すべき。児童育成施設にも人が集まらなると施設全体にも人は集まらない。人がいない施設は寂しい。そのためには、施設と施設の間にスペースも入れて共用していくべき。
- ・ 体験的遊び・学びの機能には、託児室、休憩室、情報コーナーもつけるべきで、図書館や文学館に行く人もここの託児室を利用する。母子連れで利用できるようになる。
共用した部分をたくさん作り、みんながうまく利用する。基本的には使いやすく、使える範

圃はほかのことにも使わせるようによようにする（多少規制を緩くして）。

- 施設を共用のリソースとして捉えれば、もっと整理できるのではないか。
- 人が寄る施設は、たとえば、図書館の周囲が屋外読書空間になって開かれている。気楽に行き行って楽しめる場所。施設へのアクセスもオーラがでるような雰囲気にする（司馬遼太郎記念館へ続く菜の花街道のような）。
- エレベーターがなくても歩いてまわれるような施設、四季折々の花が廊下に咲いていて、野山を歩くような気持ちで親子が歩きながらいろいろな施設に入っていくような施設ができれば、区の新たなメリットになる。
- この段階から館長になりうるべき人を作っていく。
- 計画段階からこの図書館はこうあるべきだという図書館を運営する人、読書活動を推進する人が入っていないと建築家のペースになってしまうので、その辺り（館長となりうるべき人を探す）はこれから進めていく上でとても大事である。